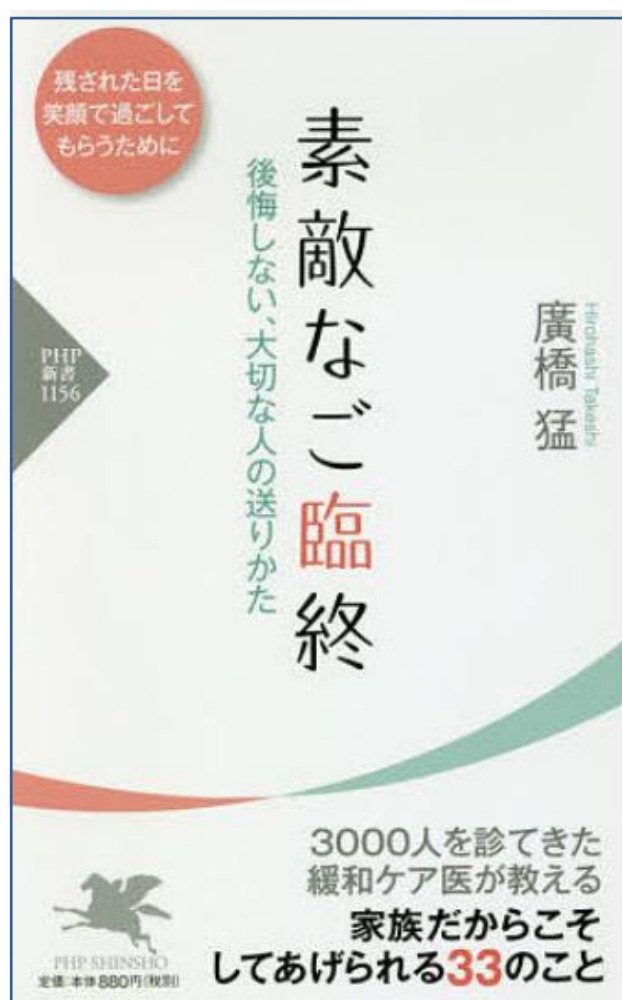


永寿総合病院 緩和ケア病棟長 廣橋 猛先生 書籍ご案内

「素敵なお臨終 後悔しない、大切な人の送りかた」

大切な人の余命を前にしたとき、家族や周りができることとは。心のケアから、実際の痛みを知る方法まで、緩和ケアの第一人者が解説。(PHP 新書 定価 950 円)



Amazonをはじめ、全国の書店に9月16日頃から並びます。
<https://amzn.to/2xb4g6o>

★『素敵なご臨終 後悔しない、大切な人の送り方』

(廣橋 猛著/PHP 新書/本体 880 円/2018 年 9 月 28 日刊)

この世に生まれてきたからには、いつかは死ぬとういことはわかっているが、愛する人や親しい人が病気で苦しんだり亡くなったりするのは、確かにつらく簡単には割り切れない。家族ががんを発症したり難治性の病気に罹患したりすると、後悔しないために最新最良の医療を受けさせ、すこしでも長生きできるように努力をするものだ。しかし、いろいろ手をつくし、治療の選択肢がなくなってくると、残念ながらあきらめることが余儀なくされる。

死にゆく人のために自分はどれだけのことをしてあげられただろうか？

もっとほかにいい治療法ややるべき介護の方法がある（あった）のではないだろうか？

もっと生きて、楽しいことをたくさんしたかったはずだろうに、かわいそうに……。

といった具合に、優しくまじめな人は、助けてあげられない自分を責め、死の床にある人を不憫な存在とみなす傾向が強いのではないだろうか。

確かに病気になりたいと思う人はほとんど存在せず、大方の人たちはなりたくて病人になったのではない。できれば、健康で長くイキイキとした人生を送りたいと思っている（た）はずだ。

それでも手を尽くした結果、治らない病気とわかった場合、人は死ぬという使命を受け入れなければならない。誰にでも等しく終わりの時はくる。たった一人で死んでいく人もいれば、多くの家族に看取られながら最期の時を迎える人もいる。

どんな最期であろうと、「いい人生だった」「いい最期だった」と、まずは自身で納得したいと誰もが思っている。そのためには、介護してくれる家族や親しい人がいる場合は、納得の医療、そして死に支度をしたいものだ。

そうはいつでも、医療従事者ではない一般の人々は無我夢中で家族の世話（介護）をしているのが一般的だ。

台東区内の病院で緩和ケア医として勤務する著者の新刊である本書は、患者やその家族が「いい臨終」ができるように生きることを提唱し、終末期の苦しい日々をいかにして穏やかに過ごすことができるかを、細かく教えてくれる「緩和ケア」入門書というべき内容になっている。難しい言葉の羅列ではなく、図などを使ってわかりやすく、まさに患者に寄り添って優しくヒントを投げかけてくれている。柔らかく暖かみのある文章からは、3000人以上の患者をみとってきた経験に裏打ちされた慈愛に満ちている。

がん絡みの書は、知るほどに（読み進めるほどに）怖くなっていくものが多いが、本書は、緊張した気分がほぐれるようなほっこりした気分になってくるのが特徴といえる。まさに読むという行為の緩和ケアを受けているような。

また、根拠のない思い込みで多くの「誤解」をしている(た)ことにも気づかされるだろう。元気になるってほしいから多くのものを食べさせていたという人は少なくないとおもうが、大事な人の気持ちを、理解したいという気持ちになってくる。そうか、それでいいのか！といった具合に。

「ステキなご臨終」……なんてイイ言葉だろう。「ご臨終です」という言葉は、決して悲しい響きではない。精一杯病氣とたたかい納得の人生を終えた人を不憫に思う……それこそが失礼のような気がしてくる。

(文責・桑島まさき 書評家で 勝海舟記念下町浅草がん哲学外来 Café メンバー)